歴史探訪クラブ

其の213

History Inquiry Club

文化財課（博物館）☎22-1720
FAX 22-2028

渥美半島の銅鐸

渥美半島の弥生時代を語る上で、銅鐸の話は欠かすことができません。

銅鐸は釣鐘のような形をした青銅器で、皆さんも歴史の教科書などで見たことがあると思います。銅鐸が作られたのは弥生時代の中期頃から後期にかけてで、村で祭りをする際に使われたようです。銅鐸の大きさはさまざまで、出土したものは数㎝から1m以上のものまであります。初めは、小さな音を鳴らす鐘として使われた**聞く銅鐸**で、その後、飾りをつけた大型の**見る銅鐸**に変化していきました。

また、銅鐸が見つかるのは集落から離れた丘が多く、そのほとんどが大切に埋められた状態で見つかっています。

では、渥美半島の銅鐸はというと、発見された中で最も古い記録は歴史書である『三代実録』の中にあります。それによると、平安時代の860（貞観2）年に三河国の村松（現在の伊川津町が推定地）で発見された銅鐸が天皇に献上されたとのことです。

また、江戸時代の1792（寛政4）年には谷ノ口の金堀池から3個銅鐸が出土したことが『田原藩日記』に記載されています。渡辺崋山もこの銅鐸を目にしており、日記である『客参録』には銅鐸の絵が描かれ、「三代実録に載せられたものとよく似ている」「直径一尺四寸、高さ三尺四寸」と記載されています。これらの銅鐸は渥美半島から見つかった記録はあるものの現在はどこにあるかは不明です。

昭和になると、さらに銅鐸が発見されて調査が行われました。1962（昭和37）年、西神戸町で耕作中に銅鐸が見つかり、1983（昭和58）年には伊川津町でも農地整備の工事中に銅鐸が発見されました。銅鐸は見つかった場所から「堀山田の銅鐸」「椛（なぐさ）の銅鐸」と呼ばれ、現在は博物館で大切に保管しています。

愛知県内での銅鐸の発見は50個以上が知られていますが、そのうち渥美半島からは記録を含め銅鐸が合計8個と、非常に多くの銅鐸が見つかっています。渥美半島の銅鐸は、全て弥生時代後期のもので、非常に大きな見る銅鐸です。特に椛の銅鐸は大きさが1m以上あり、全国でも最大級の大きさです。銅鐸が発見された地域では弥生時代後期に銅鐸を使用した祭りが行われ、栄えていたことが想像できます。

なぜ、本市で多くの銅鐸が見つかるかは、弥生時代の発掘調査事例が少ないため、まだはっきりとわかっていません。今後、新たな遺跡が調査され銅鐸などが見つかれば、渥美半島の歴史がさらに解明されていくことでしょう。

（学芸員　清水俊輝）

▲椛の銅鐸

▲堀山田の銅鐸